

## されどわれらが日々2

大学時代には同人誌を友人と出版していた。1回につき、一人当たり約8万ぐらい必要なので、バイト代はほとんどの費用に消えていった。村上春樹の小説をまねて、今読むとほとんど村上春樹のパクリのような小説を書いていた。

ある人に「あなたの小説は60歳ぐらいにならないとよいものが書けないわね。」といわれたことをずっと覚えている。「書けて一作ぐらいは何とかいものが書けても、結局それだけで終わりそうな気がする」とも言われた。なにくそとは少しも思わなかった。きっとそうだろうと思うことがあった。人の気持ちをわかることができないのに、よい小説を書けるはずがないとも思った。

20歳の青年にとって60歳はとても想像できなかったが、今60歳になってよい作品というものを書けていないことから、見事に言い当てているなあと本当に感心する。一作ぐらいはいいものが書けるといふほうの予言は今後を見ないとわからないので、楽しみにしていようと思う。

人の心をないがしろにすることは、ままあった。どうしてそんなことを考えるのだろうと不思議な気持ちで、他人の思いを知ることができず、冷たくあしらってしまい、今思っても、後悔という言葉だけではどうにもならない日々がそこにはあった。

簡単に他人の心を踏みにじる。約束を反故にする。いつの間に親しかった友人に対し冷たくあしらうことを平然とする。穴があったら入りたい日々だった。

それでも、こんな自分に温かい一言を差し向けてくれる人々がいて、私は何度も救われた。小説の「山月記」ではないが、自分の中のトラを飼いならすすべを身に着けていった。

小説は、公務員になってからは書くことがなかった。公務員としての身分を保有している以上、表現者になることを自分で制限した。特に、教育公務員である以上、まず生徒とのかかわりがすべてであるとかそ真面目に自分を縛った。そうでもしないと、何でもありになるなと考えた。自分の中で表現と仕事の区別をきちんとつけることは難しく、表現への欲望に取りつかれるのではないかと直感していたからなのだろう。

もう一度、小説を書くことがあるのだろうか。上手に書くことができる手立てを自分のものにできるだろうか。5メートルのパットを入れるようにはいかないだろうなと思うところがある。

磐城高校の文学部の皆さんのような自由にモノが書ける能力がうらやましい。それでも、いつかはきちんとした小説を書いてみたいと思う今日この頃です。

